令和７年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　牧山　　小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、６年生を対象として、令和７年４月１７日（木）に、「教科（国語、算数、理科）に関する調査」、文部科学省が指定した日（４月１８日から４月３０日の間）に「児童質問調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

１．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語、算数、理科）

教科に関する調査（国語、算数、理科）
①　身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ②　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

⑵　児童質問調査

児童質問調査
○　学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

３．教科に関する調査結果の概要

⑴　全国・本市の学力調査（国語、算数、理科）の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	8.6	54	9.1	53
全国	9.4	67	9.3	58	9.7	57

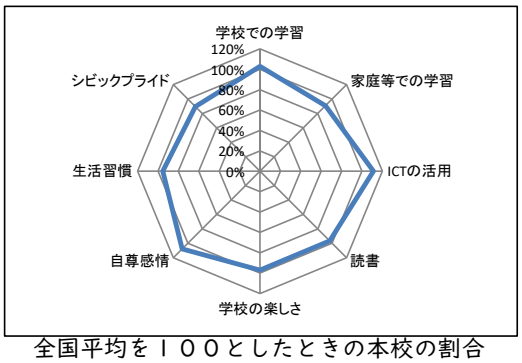
⑵　本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	全体的に平均正答率は，全国正答率を下回っている。特に「書くこと・読むこと」の領域は，全国平均正答率と比べて，平均正答率が低い。また，記述式の問いに対して，無回答率が高くなっている。一方で，「知識及び技能」の領域の平均正答率は，全国平均正答率を上回っている。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができるかどうかをみる問い	
	努力が必要な問題	書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができるかどうかをみる問い	

算数	全体的な傾向や特徴など	全体的に平均正答率は，全国正答率を下回っている。特に「数と計算」の領域は，全国平均正答率と比べて，平均正答率が低い。また，短答式の問いに対して，全国平均正答率と比べて，平均正答率が低い。一方で，「変化と関係」の領域の平均正答率は，全国平均正答率を上回り，記述式の問いに対しては，全国平均正答率と同程度である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	「１０％増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すことができるかどうかをみる問い	
	努力が必要な問題	数直線上で、１の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる問い	

理科	全体的な傾向や特徴など	全体的に平均正答率は，全国正答率を下回っている。特に「『生命』を柱とする領域」は，全国平均正答率と比べて，平均正答率が低い。また，記述式の問いに対して，無回答率が高くなっている。一方で，「『粒子』を柱とする領域」の平均正答率は，全国平均正答率と同程度である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解しているかどうかをみる問い	
	努力が必要な問題	花のつくりや受粉についての知識が身に付いているかどうかをみる問い	

４．学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問調査結果の概要



全国平均を１００としたときの本校の割合

質問調査の結果分析

・「先生は，あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」「いじめは，どんな理由があってもいけないことだと思いますか」との問いに対して全ての児童が肯定的に回答している。
・国語や算数の学習に対して苦手意識を感じている児童が４０％を超えている。主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びが，児童生徒の自己肯定感や自己有用感等に影響を与えている可能性があるため，今後も学校全体で授業改善を進め，児童が「わかった」「おもしろい」と思える授業にすることが必要である。また，ICT機器を使った情報整理や発表のスライド作成などへの苦手意識も見られるので，ICT機器を活用した学習を進めることで，児童に学ぶ楽しさや学びの達成感を味わわせることにつながると考える。

５．調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

①　教科に関する取組

・学校図書館の環境整備や読書活動の充実を図り，児童の知的好奇心を高め，学習意欲や思考力向上につなげる。
・ICT機器の効果的な活用とドリルアプリを活用した個別最適な学びを充実を図り，児童の主体的な学びを促す。

②　家庭生活習慣等に関する取組

学校だより等，家庭への各種配布物を通して，本校の取組や児童の学習面や生活面の様子を保護者に伝え，家庭と協力・連携して，児童の学習習慣や生活習慣についての指導を継続的に行っていく。